

研究専攻（専門領域）		文化環境研究専攻		学籍番号	06CS020
氏名	米田 智一	ローマ字	YONETA Tomokazu	国籍 (留学生)	
修士学位論文名		カバコフのインスタレーション			
提出年月日		2009年1月13日		指導教員	外山 紀久子
体裁 (論文)		44頁(1頁文字数1600字)		言語	日本語
別冊添付資料等		図版			
キーワード		イリヤ・カバコフ インスタレーション ロシア現代美術			
<p>本稿では、ソ連出身の現代美術家であるイリヤ・カバコフのインスタレーション制作について論じた。彼の活動に関し、ソ連政権下のモスクワでの活動や、その後国外に亡命し、ソ連での芸術活動や生活全般における影響のもとで構築されたトータル・インスタレーションと呼ばれるインスタレーション作品の制作活動の時期から、その後『棚田』など、ソ連との関連性が排除されたインスタレーション作品を制作するに至る過程の中、一貫して見られる彼の作品制作の本質的な特徴を浮き彫りにすることを試みた。</p> <p>イリヤ・カバコフ(1933-)は、旧ソ連のドニエプロペトロフスク(現ウクライナ)出身のアーティストである。1990年代前半に至るまでの彼の活動は、ソ連との関係性なしでは語ることはできないものだった。彼はモスクワで暮らしていた時期には、ソ連政権による芸術弾圧の下で、表向きには絵本の挿絵作家として、他方で非公式芸術家としての活動を行っていた。亡命後は主に欧米での活動を展開し、『アパートから宇宙に飛び出してしまった男』など、ソ連の生活風景をリアルに再現し、またそうした環境で生活していた人々の精神状態を反映する登場人物を作中で描いてきた。しかし90年代後半に入り、『見上げて言葉を読む』『棚田』などの作品を制作するに至り、カバコフをソ連との関連性で語ることの必然性は薄らいでいく。</p> <p>このような展開を見せるカバコフの作品制作に関し、本項では以下のような構成でその特徴を明らかにした。まず第一章にて、カバコフのソ連時代の活動を振り返り、彼の芸術家としての特殊な立場と、ソ連に対するアンビバレントな感情を指摘した。その上で2章以降、カバコフが亡命以後本格的に制作を開始することになるインスタレーションの性格づけをおこなった。ここではまず、彼が亡命直後、ソ連の社会性を背景につくりだしたトータル・インスタレーションの定義の詳細を記述したうえで、その概念がソ連とのかかわりを絶った90年代後半以後の作品にも受け継がれていくことを指摘した。本稿ではカバコフ自身が語るトータル・インスタレーションの特徴の中から、絵本作品との関連性、観客の作品受容のあり方を規定する空間の能動性に着目し、ソ連との関連性を絶った近年の作品においてもそういった特徴がみられることを指摘したうえで、そこから新旧問わず彼の作品制作における一貫した方向性として、社会的、文化的に断絶された二項の対立と、その克服の可能性の提示という特徴がみられることを結論づけた。</p>					